平成 29 年度第2回うきは市総合教育会議　議事録

１．　　日時　平成 30 年 2 月 21 日（水）開会 14 時　閉会 16 時
２．　　会場　うきは市役所　２階庁議室
３．　　出席者
◆委員(敬称略)

市　　長	髙木　典雄
教 育 長	麻生　秀喜
教育長職務代理者	西見　修一
教育委員	處　　愛美
教育委員	家永　由里子
要綱第４条出席者	学校教育課指導主事　塚本　達也
要綱第４条出席者	UkihaBEE　馬場　亮子
事務局	企画財政課、学校教育課

４．　　議事　（１）新学習指導要領移行期における小学校外国語活動及び外国語科の取り組み
　　（２）質疑・意見交換
　　（３）その他　次回の協議事項について

５．　　議事録

〇開会
〇市長あいさつ
〇事務局より出席者紹介
●市長
　それでは、しばらくの間議事進行を務めさせていただきます。
　（１）新学習指導要領移行期における小学校外国語活動及び外国語科の取り組みについて、先ほど紹介がありました塚本先生の方からご説明をしていただければと思います。よろしくお願いします。
●塚本主事
　学校教育課の塚本です。本日はこういう外国語教育についてご説明させていただく機会を設けていただき、本当にありがとうございました。私の方で説明をさせていただきたいと思います。（以下、パワーポイント、資料説明）
●市長
　ありがとうございました。塚本先生には分かりやすくご説明をいただきました。しかし、内容は環境の変化でなかなか時代についていくのは大変だなというのが率直な感想なのですが、委員の皆さんから自由に塚本先生にご質問いただいてもいいですし、総体的なご意見でもいいですので、お話しいただければと思います。よろしくお願いいたします。
　今後、学習指導要領の大きな狙いとして、まず分かりやすいのは、時代の趨勢、AI、人工知能とか、グローバル社会に耐えられるような子どもを育てていこうというのが大前提。次に、グローバル化の社会で特に外国語の中でも英語に特化した教科化、あるいは英語の外国語活動の前倒し。そして 3 点目が、今までは得てして先生が一方通行で暗記主義的な教育方針から、暗記ではなくて創造性というか、考える力あるいはコミュニケーション能力を付けさせるということで対話的・主体的な深い学びというふうに、他にもあるかもしれませんが、だいたい体系づければそういうことでよろしいのでしょうか。

●塚本主事

今求められている資質能力というのは、自分で考えて、判断して、発信していく。発信というところが今求められているところではございます。ただし、その中に「相手を意識して」という言葉が新しい学習指導要領の随所に入ってきています。一方通行なこちらから押しつけの発信ではなく、相手を意識したというところで、外国語に関しましては発信する相手が異文化の相手になりますので、異文化まで理解した上での発信というところは言われているようです。

●處委員

自分自身の経験から言っても、外国に旅行すると、もうちょっと英語ができるという思いがあります。それは現地の方とのコミュニケーションであったり、そこで自分の思いがもう少し伝えられたらな、という思いであったりするので、そういうところをこれからの社会、時代を担う子どもたちにはできるようにしてほしいと思う。私たちが学んだ英語というのは大学受験のための英語だったので、とっさに言葉が出てこないというのはすごく感じること。子どもたちにはもっと学んでほしいというふうに思います。これは体験を通してでないと、なかなか学びに向かう力というのは子どもたちも出てこないと思う。移行期間で総合的な学習の時間を外国語に使ってもいいよ、というようなことも言われているようですが、私は総合的な学習の時間の体験を外国語に向かうものにカリキュラムマネジメントする、体験的な外国語あるいは外国の文化に接するものにしていけたらいいのではないかと思います。

●市長

文化とか歴史とか、関係なさそうで関係ありますよね。そうしないと、コミュニケーションにつながっていかない。

●塚本主事

発信する上で、当然相手の文化を理解することも大切なのですが、日本文化をまず知っておかないと発信できないというところがあるので、今言われた総合的な学習の時間を大切にしていかないといけない。特に平成 32 年に新しい学習指導要領が入るときには、今使おうとしている総合的な学習の時間の 15 時間は元に戻ると言われています。ですから、文科省もそこは大切にしていきたいと思っているのではないかと判断します。

●家永委員

私は大学受験せず医療関係に進みましたから、医療的な英語の方は何とか自分の職業にしなければならないので必死で覚えたりしました。ドクターとの会話の中で英語が出てきますが、それは仕事の中なので必然的に覚えなければならないというところがあります。でも子どもたちが学ぶのはちょっと違った形なのかなと思っているのが一点です。

私にとってはローマ字から段階的に習ったので、今のように英語が出てくる時代ではなかったので、子どもがポンポンと話すのを感心しながら聞いています。発信することを塚本先生はすごく言われていて、自分が住んでいるうきは市のことを子どもたちはどれだけ発信できるのか興味も抱きました。日本語すら発信できているのかと思うところがありますので、まずは自分の住んでいるところを学ぶ、そして日本語で発信することと英語で発信することを学んでほしい。

あとは、体験がモノを言うのだろうなと思います。異文化の人たちの顔を見ることはそこに接するということだから、すごいことなんだろうなと思います。

●西見委員

子どもたちが英語に触れる機会が多い地域、都市部と少ない地域とある。いつか市報を見ていましたら、うきは市も外国の方が 100 人を超えている。以前に比べれば増えてはいますが、子どもたちが日常で英語に限らず外国語に触れるというのは非常に少ないのかなと思う。そういう地域差のある中で、当初、英語活動をしようという時に帯び状にしたことがありました。週 1、2 ではなく、毎日 5 日間 15 分ずつやる。そういった方法も今回は考えられるのでしょうか。教科としてはなかなか難しいと思います

が、私の経験から言えば、当時学習指導要領は内容だけでした。方法は別冊の解説で出てきて、それももちろん強制ではないというやり方だった。今回は内容と方法がセットである程度示されている。方法については帯び状にするなどうきは市の子どもたちの状況に合わせて配慮ができるのか、教員数とも関わりが出てきてうきは市にはやり難いのではないかと考えながら聞いていましたが、現段階でその辺り何かありますか。

●塚本主事

基本的には一時間 45 分の授業を来年度、再来年度に関しては 1 時間丸ごとでやっていただこうかと思っています。ただし、西見教育委員が言われたようにカリキュラムマネジメントとして、各学校の特色として、例えば 2 コマあるうちの 1 コマを 15 分ずつ月・水・金に分けてやっている学校がございます。本年度まで国と県の指定を受けて宮若市がその事業を行っており、視察にも行かせていただきました。そこでやられていたのは、15 分を週 3 回、それと 1 時間一コマの授業をやっておられた。なぜそういうことをするかというと、今小学校は週 29 コマで回しています。1 日 6 コマの 5 日、大体 30 コマあります。29 コマで回しながら、29 コマを崩さずにやろうと思えば、そういうふうに 15 分ずつ 3 回というようなことも考えられるかなと思います。ただし、15 分をやるための教材がすぐにはございません。例えば市の方でそういったことをやっていこうとすれば、15 分のカリキュラムを作っていくという形になります。今年新教材が来てすぐにそれをやるというのは、先生方にも負担があるということを踏まえまして、来年度・再来年度に関しては 1 時間の授業でやろうと考えています。将来的に可能ということではあります。

●西見委員

教員の他市郡との異動は避けられない。私自身は先ほどの説明に関して、うきは市が他市郡に比べて遅れているとは思わない。他市郡との異動の中で入ってこられた先生の指導については各学校で行うのか、うきは市全体の体験の中で育てていくのか、その辺りはどうでしょうか。

●塚本主事

決定事項ではありませんが、研修を 1、2 回おこなった程度では先生方の授業力も上がっていくものではないと思っていますので、センターと相談しながら全教職員研修、来年度も外国語活動で小学校はやるなどが考えられます。幸い、今回行った研修は非常によい評価をいただいておりましたので、先生方も興味関心は持たれているのかなと思います。今年は理論面もかなり話をしましたので、実践的なところももう少し先生方と一緒に勉強していきたいと思っています。

●麻生教育長

外国語教育もタブレット教育もうきは市は他の市町村よりも先行していると思っています。何故かというと、やはり先を見てやっていかないと結局学校の先生方も苦しい。そうならないよう少しずつ行っております。もう一つは先生方に本物を見てもらいたいということで、宮若市や阿蘇市などいろんなところに先生方と行き、実際の授業を見て、これは使えない、これは使えると一生懸命カリキュラムを組んでいただいています。先生方をサポートする意味で、先ほど言いました ICT の充実は非常にありがたい。今後は ALT や日本人の ALT 的な方を厚めに入れていき、バックアップしていければと思っています。

冬休みにやりました小学校の先生方の研修を私も見たんですが、本当に一生懸命楽しくやっていただいていて、自分たちで英語教育を何とかしていこうというところが本当にあるので嬉しいのと、他市町村から入ってこられても、そういった土壌があるので先生方にも理解していただけるのではないかと思っています。

●市長

塚本先生から 2045 年問題というのがありました。私は 2 年ほど前に話を聞いて、絵空事のように聞いていたのですが、去年の 12 月に文部科学省審議会で 2045 年問題が取り上げられて、真剣に国が議論し始めてきた。もう一度整理をすると、2045 年くらいに AI、人工知能が人間の知能を超える。そうす

るとコンピューターがコンピューターを作る時代になる。AI なしに我々は生きていけない世界になる。文科省審議会で出ていた話ですが、一つに「不老」、老いない。人間は一生死なない。例えば AI や IoT を常に体に付けていれば毎日検診をしてくれる。病気になることがない。そういう時代がくるというような言い方と、もう一つは「不労」、働かなくてよい。全部人工知能がやってくれる。厳密にいうと、誰しも働かなくていいというわけにはいかず、一部の人は働かないといけない。塚本先生が言っていたように「なくなる仕事」と全く「新しい仕事」が出てくるという世界です。今ある仕事で、ほとんどがなくなっていくんだけれども、なくならない分野として代表的なものが学校の先生。そして、馬場さんがやってくれているクリエイティブな前例のない新しいものを作る想像力。クリエイティブな人間が世の中には結構いるのですが、そういう職種はなくならないということが言われています。そこで今日は、馬場さんにお出でいただいています。馬場さんは今、インバウンド対応ということで、すごく英語が堪能ですから、全部馬場さん頼りでインバウンド施策や他にも色々やっていただいています。もう一つは、クリエイターを育てようと例えば幼児教育の中でリトミック教育など、もっと文化力や感性、想像力を養えるような教育をやっていこうということで、この中でも議論があったのですが、クリエイターをどう作るかも馬場さんが携わっています。

そこで、もしよかったら馬場さんから塚本さんへの質問でもいいですし、ご自分が今まで地域おこし協力隊も含めて携わってきた中で、全体的に今後うきはの子どもにこういう教育をこうなってほしいというのがあったら、自由に発言いただきたい。

●馬場氏

感想みたいな形になると思いますが、大人として外国の方と英語で例えばコミュニケーションしているときに、やはり英語力というよりも、意見や議論を当たり前に戦わせるというかコミュニケーションが前提になっていて、よく意見を求められます。ただ、日本人のこれまでの勉強の仕方というのは、どちらかというと正解を教えられる、授業の中でも正解しか発言が歓迎されない、授業中は静かに聞かないといけない、良い子の形、優等生に求められる姿というのが日本の姿にあって、それが英語圏の文化だと、あるべき姿がまず違っているのかなというのがありまして、そういったところを多分文科省の方でも分析されて、大分前から表現力であるとか意見を言えるようになることを重視してこられたのかなと思います。どうして日本人は意見を言うのが苦手なのかを考えたとき、きちんと人の話を黙って聞きましょうとか、あまり自己表現が重視されない。むしろその場を、例えば皆と歩調を合わせて静かにすべきときは静かにしましょうということが推奨されてきたからなのかなと思う。

今、ちょうどオランダから 2 名の劇団員の方が来られていて、市内の保育園、幼稚園 10 カ所を全部回って、一カ所一カ所子どもの描いた絵を使って劇をする取り組みを行っています。対象年齢が 3 歳から 5 歳の子どもたちなのですが、子どもたちの反応を見ていますと、うきはの子どもはシャイだと聞いていたのですが、ものすごく反応が良くて、「わぁ～」って笑ったり一緒に踊りだす子もいたり、ものすごく反応をする。それは劇の最初にオランダの方達からも「この劇は子どもの反応がないと成り立たない。交流型、コミュニケーションをとる劇ですから、子どもさんはシーンとするのではなく、是非しゃべったり笑ったり動いていいですよ」、ということを最初に先生に言ってくださいと言われるんです。それを最初に伝えたら、子どもたちも「あ、いいんだ」と言う感じで、のびのび笑ったり、「あれは誰々の絵だ！」と反応してすごく盛り上がっている。その盛り上がり方はオランダで知った時と全然変わらないということです。台詞があまりなくて体の表現などでする劇なのですが、最初は緊張している子どもたちが、最後は外国人ということも意識していないくらい、すごく自分たちの気持ちを表現するようになっていく。素地というか同じものを子どもは持っていて、自分を表現していいんだよという場面ではいくらでも表現するものを持っているんだろうという気持ちがしています。絵も決して日本の子どもは画一的ということはないし、すごくクリエイティブで、絵が素晴らしいということを今回のオランダの方も言われていました。表現する中身は皆持っているので、例えば静かにすべき時はできるようにす

るけども、外国人と対面するというときは自己表現をものすごく求められるので、英語だけでなく、自分の表現を英語のときはしていくというような、例えば英語の授業ではどんどん意見を言っていいし、それが間違っていても、何でも発言してもいいんだよというような態度そのものも英語の授業で教えていけるといいのかなと感想として思いました。多分それがすごく意識されて、カリキュラムが変わってきているんだろうなと思います。ディベートとかで正解を誰かが言って勝つのではなく、常に「あなたどう思う？私はこう思う」ということを言いながら、色んな外交などもなされたりするんだと思うし、創造性も自分のことを物おじせずに表現するということに慣れていけば、子どもたちはもうそれを持っているんだろうと思う。

うきはには可能性を今の劇団の方たちを見て感じました。子どもたちはすごく元気で独創性がある。それを英語教育を通して、英語の時はそれをますます表現していいんだよということに慣れていければ、子どもたちも楽しいという気持ちを育めるのではないかと思うので、ぜひ先生方が自主的に楽しむ、やっていこうと思っていらっしゃるということなので、子どものやる気を伸ばしながら、創造性と一緒に育てていければいいなと感じました。

●市長

ありがとうございました。以前馬場さんから聞いた話で、フランス人はほとんど英語をしゃべれるけれど、フランスに来たときはフランス語でしか対応しない。自国の文化意識がすごく強いということを聞きましたが、それはそれで日本のアイデンティティも含めて、英語は英語でということなのでしょうね。

●馬場氏

発言をしないとまるで意見がないと思われてしまう。日本人はマナーがいいので、あまり私は私は、ではなく控えようとするんですけど、そこの捉え方自体が文化なので、コミュニケーションの価値観というか自分の表現についての価値観そのものを英語文化でのやり方を教えていった方がいいのかなという気がします。日本人は知っていても言わない、秘すれば花、能ある鷹は爪を隠そうとするんですけど、英語圏は出さないと、ないと思われるところがあるので、そういう異文化も言葉と一緒に教えながら、何でも間違ってもいいから発言したら、「素晴らしいね」「今勇気があったね」と表現することを勇気づけてあげると、ものすごく反応がよくて私は感動しました。うきはの子どもたちの前向きさやエネルギーが素晴らしい。

●市長

並行して、当然フランス人のように日本語を大切にしっかり守りながら。

●馬場氏

塚本先生はご存知と思いますが、日本語能力がないと英語力はつかないし、色々質問されて意見を言えるということは色々知識も必要で普段から日本のことを考えてないといけない。日本の中のことを知ったり日本社会のことをまずは学ぶことは大前提。

●麻生教育長

馬場さんにお尋ねしたい。商工会がやっている上海との交流で中学生と一緒に上海に行ったときに、私もそうであったのですが、うきはの中学生がショックを受けていた。たまたまその学校はそうだったのでしょうけど、中国の子どもたちは英語がしゃべれる。目の前でタブレットをぼんぼんやっている。なおかつ日本語も交流に向けてでしょうけど、それなりにしゃべれる。それを見て連れて行った中学生がショックを受けている。うきはの子どもたちはこういう環境だから、どこかの段階でカルチャーショック、異文化理解を与える必要があるのではないかと教育的立場で思っている。その辺はどうか悩んでいる。

●馬場氏

総合学習の時間でも、例えば在住の外国人の方や留学生などでもいいのですが、もう少し来やすい方

に来ていただいて、授業でなくても文化力を育てるみたいな意味で何らかのワークショップをしてもらうとか、接する機会を年に 1、2 回でも設けるといいのではないか。私の時代はそこまで進んでいなかったので、ALT との文化理解のような授業が年に 1、2 回、小学生のときにあったのですが、未だに記憶しています。だから、ものすごくインパクトがあると思います。小学生くらいの頃に、例えば中国人の奥さんが来て餃子作りをしたんですけど、そんなことをすごく覚えていて、そのときの餃子の美味しさなんかを覚えていたりするので、そのくらいの年齢で、回数は少なくても文化に外国というものがある、世界にいろんな違う人がいるということを接して感じる、カルチャーショックを受けるということが、結構後々の人生に影響を与えたり好奇心を育んだり、回数は少なくても効果は相当のものになると思います。

●市長

塚本先生から今後の課題で ALT 等の活用というお話がありましたが、馬場さんには色々お力添いをいただこうかと、そういったことをしていこうかなと思っているところです。

塚本先生の話を聞いていて、総合教育会議が立ち上がって教育大綱を作りましょうと委員の皆さんと議論をした中で、大きく出てきたのが学力向上と社会を生き抜く力をどうするか。特に生き抜く力のところで、これは私の我流なのですが 2 つあって、社会を生き抜くためには素敵な笑顔が大事。2 つ目は自ら考え自ら行動する力、それを大きく 3 つに分けると、表現力と交渉力とコミュニケーション能力。塚本先生の話にぴたりと当てはまるようなまさに学力向上と社会を生き抜く力はイコールだなとつくづく思っています。

昨年 12 月 8 日の閣議決定で、新しい経済政策パッケージというのが発表され、人づくり革命と生産性革命の 2 つがある。これは地方創生に全部つながってそれを積極的にやっていこうと。人づくり革命はまさに人材育成で、皆さんと議論している話。生産性革命も、国が考えているのはテクノロジーの進化が激しい、つまり ICT や AI、IoT を駆使した先端設備技術を企業が導入して生産性をあげると大号令がかかっていて、そうすると全てがつながっていく。

一番苦労が多いのは現場を預かる先生方だと思う。聞き流してもらってもいいのですが、一言でいうと子どもの学びの心に火をつける、勉強への動機づけを与えるのが本当の先生、スーパー先生ではないかとそういう思いがあるので、先生には目の前の英語教科の研修などあるかもしれないが、ぜひ我々と一緒になって大局的に世の中が、国がどういう将来像を描いて今施策を打っているかという認識を頭の中に入れて、子どもの年齢に応じた学びの心に火を付けれるような先生が出てくると本当に変わってくるのではないかと個人的に思っています。

●家永委員

先ほど馬場さんがワークショップをという意見を言っていたけれど、案外苦手な子は多い。英語力をアップするにはそこもポイントかなと思っています。ワークショップは、じーっとしている子はそのまましゃべらずに終わる子もいるじゃないですか。そうすると、大人になってそのまま何となく終わってしまう子もいるので、その辺が、英語力を付けるのにワークショップのかけ方が魅力かなと思う。先生方の中にも苦手と言われる方もいらっしゃるとお聞きするので、結局は人の中で話すということが結局つながっていくのかなと馬場さんの話を聞いて思います。

●塚本主事

一番最初に外国語活動が今の 5, 6 年生に入ったときは主体的に話をしようということで、外国語は英語でなくても良かった。途中で英語と規定されました。子どもたちのコミュニケーションスキルというか、外国語だったら日本語で話せないことも話せるかなというところがスタートです。主体的に話す態度の育成です。ただやはり、現状 40 人に先生 1 人ということでのワークショップはなかなか難しくて、県の主催行事として、例えば小学生向けのイングリッシュ広場というものもあっていたのですが、今年でそれも終わってしまって、やはりそんな機会を年に 1 回持って、例えば学校単位でもいいし、う

きは市で年に1回子どもたちを集めて、ワークショップを開くというようなそんな経験は子どもたちの中では大きいかなと思います。県のALTなどもこちらから要請があれば活用できるはずです。

●馬場氏

先ほど在住の方といった部分ですが、例えば表現力、文化、クリエイティブティを育てるみたいなものでいうと、在住の外国の方に来ていただいて皆で何かゲームをするとか、絵を描くワークショップをするとかお勉強じゃないことを外国語しかできない方に一緒に教えてもらって、楽しく参加することで、外国人だということを意識しないで慣れるような、ダンスでもいいかもしれない。外国人の見た目をした人が英語で色々言う、皆で体を30分ほど動かす、そういうのでも抵抗感はなく、ただ外国の人と触れて何かをしたいねと。授業と違った形の外国人と触れあう時間。

●塚本主事

県でやっているイングリッシュ広場がそういったタイプで、何かを一緒に作るとか、ダンスをする、スポーツをするという活動がワークショップとして有効だろうなと思います。子どもたちは知らず知らずのうちに英語を使っている。聞いて繰り返している、それこそ体感している。

●馬場氏

一つ思い出したのでご紹介したいのですが、ある保育園で英語の授業をしているわけではないのですが、保育園児のお子さんでも「flower」とか「sun」は知っているみたい。劇の中で描かれた絵を劇団の方が見せるのですが、普通子どもたちは「お花！」とか「太陽！」とか言うのですが、一人の子が「英語で言わな分からんばい」と言って、それからは他の子たちが「sun！」「flower！」とみんな言い出して自然に英語で言いだした。きっと聞いてて既に知っている英語が小学生くらいは結構あって、恥ずかしいとか間違ったらどうしようという気持ちがなければ割と出てくるのかなと思う。劇とか活動する中で、英語を知らないけど英語をしゃべっているという状態を作ってあげると自信につながるかもしれない。

●市長

以前、馬場さんは高校生に英会話を教えていて、インバウンドでお客さんが来た時にいきなり通訳させて、そういう生きた英会話の活動をやっていただいていました。是非その活動を続けてほしいと思います。その他、全体的な話で何かありますか。

●處委員

今言われている、自分の考えをちゃんと表現するということで言えれば、新しい特別な教科道徳は考えて議論する道徳ですので、そこで日本語をきちっと表現していただければいいと思います。

●市長

自分の考えを持って、自分で行動するような土台が必要なのでしょうね。

●處委員

日本人はそれがないわけではないと思うんです。地域のおばちゃんの井戸端会議を見ているとみんな自分の意見を言いっぱなしで、特段結論が出るわけではなく自分の意見を言っている。持ってないことはないと思うからそれをどう表現するかだと思います。

●塚本主事

道徳ということを言われましたが、特別活動「学活」の中でもそれが今小学校の中でも一生懸命やられていて、自分が意見を言う、友達の意見を聞く、そして自分の意見と友達の意見を合わせる。そして一つのアイデアを作っていくという取り組みが学活のなかでしっかりやられている。

●市長

わかりました。他に特段なければ、（３）その他で次回協議事項について事務局からお願いします。

●事務局

次回は平成30年度に入ってからになります。時期についても未定でございますので、時間の余裕を

もってお知らせしたいと思います。協議の事項について、皆様方から何かこういったことを話をしたいということがあればお伺いします。今日でなくても良いので、いつでも事務局にお知らせをいただければと思っています。また、うきは市教育大綱ができて2年目が終了するということになりますので、これについての中間評価的なことも必要かもしれませんので、それも含めてご意見いただければと思っています。よろしくお願いいたします。

●市長

引き続き、閉会をお願いします。

●事務局

貴重なご意見ありがとうございました。今日のお話を聞く中で、英語教育そのものが目的ではなくて、それを通して文化的教養であるとか自己表現のあり方を学ばせるために今回の改訂があるのかなと強く感じました。これを持ちまして会議を終了します。本日はありがとうございました。

〇閉会